

氷積の章

尾池和夫選

2025年12月号

霞袂集

さといもの絵の皿が好き衣被
白露けふ流るる雲のよどみなく
くろがねの鍋洗ひをり豊の秋
海を来て五湖のひとつに鳥渡る
爽籟や熊野御幸の起点の地
見て見たと振る虫眼鏡涼新た

尾池葉子
長野眞久
三和幸一
原 稔
古川邑秋
大口彰子

氷凌集

塀のなき村の学校秋の空
厚蒔きの畝こんもりと菜を間引く
筑波嶺のゆがんで見ゆる秋出水
新涼の嵯峨野あるけば古墳塚
S Lの脱線現場猫じやらし
星飛ぶや段丘面は野菜畑

大野邦夫
羽鳥正子
鴻坂佳子
重富國宏
益子桂子
佐藤美智子

氷積の章

尾池和夫選

2025年11月号

霞袂集

校了の朱の字や蚯蚓鳴く夜なり
草市の供花一本に迷ひけり
八月や人のかたちの雲流れ
病む人へ優しき嘘や秋の暮
鳴り響く津波警報雲の峰
秋天やぐんと歩幅の伸びてをり

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
原 稔
余米重則
古川邑秋

氷凌集

宮相撲ゆかりの力石二つ
新涼や真珠筏の整然と
秋暮し木蔭に群るる牧の牛
川上へ堰を越ゆるは鮎の群
ががんぼの薄き死のあり紙の下
古池やあかはら突と立泳ぐ

大野邦夫
森すゞ子
渋谷啓子
西五辻芳子
佐藤美智子
城島千鶴

氷積の章

尾池和夫選

2025年10月号

霞袂集

土佐なれば鯉潮とぞ青葉潮
溪水を受くるバケツの真桑瓜
滝行の人のかたちの水しぶき
さりげなく死後を語りて夜の秋
水音を風運び来る夏料理
玉虫の飛び立つ空の広さかな

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
原 稔
古川 邑秋
大口彰子

氷凌集

音無きは閑寂のあや遠花火
囃されて角を出したるかたつむり
黄槿の群に潮満ち村眠る
ひと雨を待ち涼しさを待つてゐる
遠雷や抜くべきプラグこれとそれ
ブロンズのうさぎ向き合ふ日の盛

渋谷啓子
重富國宏
西村みゑ子
森すゞ子
南田美恵子
真下章子

氷積の章

尾池和夫選

2025年9月号

霞袂集

寄り来るは鹿の子ばかり昼餉どき
発ちてすぐ馬の糞する賀茂葵
大夏野未踏といふは美しく
噴水のやむ時われに返るとき
背戸の山暮れて明るき栗の花
夏館梁に手斧のはつり跡

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
三和幸一
原 稔
岡橋啓二

氷凌集

一瞬の当り山女の流し釣
神山に夏雲流れ社家の町
梅雨明や夫持ち歩く虫めがね
八十年今も戦後や沖縄忌
剪り詰めし木々の勢ひ梅雨の蝶
草むしり後ろ後ろへ草を積む

大野邦夫
竹中教子
吉田恭子
重富國宏
羽鳥正子
酒井富子

氷積の章

尾池和夫選

2025年8月号

霞袂集

水浴びの水散らさるる鵜小屋より
粽結ふ紐は谷間の狸蘭
春三月月その後の能登に二泊して
貼紙の増ゆる釣具屋夏に入る
鬼おこぜ背鰭を外し売られけり
ずざずざと麒麟の走る立夏かな

尾池葉子
大島幸男
長野真久
原 稔
余米重則
大口彰子

氷凌集

曇天や一枚着込む田植どき
海に沿ふローカル線へあいの風
武蔵鎧の仏炎苞や初夏の雨
泥んこの五年一組田植中
間合良く手旗信号日の盛
草茂る十字架隠れある墓石

益子桂子
大野邦夫
西村みゑ子
重富國宏
渋谷啓子
酒井富子

氷積の章

尾池和夫選

2025年7月号

霞袂集

花冷の正午を刻む時計台
桜散る集会場の竹箒
さめざめと花散り戦後八十年
うぐひすの一声あとは風の音
囀や竹炭の窯修理中
花曇地震計おく時計台

尾池葉子
大島幸男
長野真久
三和幸一
伊藤武敏
古川邑秋

氷凌集

山茱萸の花や名古屋の滝の跡
曲水の宴や羽觴揺れ巡る
霾や遠嶺へぐいと鋏をふる
伐採地わらび浄土となりにけり
つばくらめ空の直線自在なる
日を弾く白亜紀層へ春の潮

城島千鶴
西五辻芳子
吉田多々詩
遠藤長代
佐藤美智子
鴻坂佳子

氷積の章

尾池和夫選

2025年6月号

霞袂集

春雨や霰こぼしに音の消え
急がず休まず貸農園の春の色
からからと風を喜び花馬酔木
遊ぶ子の影やはらかし水温む
木屑飛ぶ鑿の一撃冴返る
中庭に人を待つ椅子春の昼

尾池葉子
大島幸男
長野真久
原 稔
余米重則
大口彰子

氷凌集

戸袋の中の賑はふ雀の巢
卒業の同期肩組み周航歌
立ち寄りし湖北の味の鮎なます
虎杖を折れば子供のころの音
つちふるや力の限りドラ打つ子
満州はわがふるさとや鳥帰る

洪谷啓子
重富國宏
吉田多々詩
大野邦夫
西村みゑ子
木村静子

氷積の章

尾池和夫選

2025年5月号

霞袂集

かすかなる音にうすらひ揺らぎけり
齋場の一夜に積もる春の雪
杉山に杉の香籠る二月かな
船を待つ糶場の台車春寒し
乙巳の縁起物選る達磨市
行く先は西湖の畔柳絮とぶ

尾池葉子
大島幸男
長野真久
余米重則
伊藤武敏
四宮陽一

氷凌集

美しとおもふ凶器や軒氷柱
初午の御下がりの鯛みづみづし
梅月夜天神さんの帰り道
小さき影とらへきれずや木の根明く
古枝の余力ありけり茨の芽
老ゆること亦よきかなと花を待つ

羽鳥正子
城島千鶴
重富國宏
益子桂子
渋谷啓子
服部喜美子

氷積の章

尾池和夫選

2025年4月号

霞袂集

寒晴や京を南へ出で来れば
托鉢の笠深くする虎落笛
冬の霧大和も端の生駒谷
みづうみのあるが誇りや初景色
松過の神鶏かくもよく鳴けり
いつの間に群はづれしや白兔

尾池葉子
大島幸男
長野真久
原 稔
古川邑秋
大口彰子

氷凌集

大寒や工場の吐く水蒸気
歳徳棚正して拝む三世代
一隅を照らす灯のゆれ初比叡
麻痺の手に手仕事遠し毛糸玉
一頻りにぎはふ地鳴き日脚伸ぶ
待合すスイツチバック山眠る

佐藤美智子

城島千鶴
竹中教子
遠藤長代
羽鳥正子
川内一浩

氷積の章

尾池和夫選

2024年3月号

霞袂集

闇へ朝しんしんと押す霜のこゑ
休みつつ歩む杖なり冬木の芽
髭すこし伸びたる心地焚火果つ
鯛焼の生きてをるぞと持ち帰る
風呂吹や古びし椀の輪島塗
うたた寝の母やはらかし枇杷の花

尾池葉子
大島幸男
長野真久
原 稔
余米重則
大口彰子

氷凌集

咳き込めば母のいたはり襖越し
風神の袋の破れ空つ風
角刈りの生垣朝の霜の艶
干菜吊る上州の風いただきて
糖度計のぴぴとよき音冬りんご
冬鷺の蓑毛乱れてゐたりけり

佐藤美智子

重富國宏
遠藤長代
益子桂子
真下章子
城島千鶴

氷積の章

尾池和夫選

2024年2月号

霞袂集

水を出て石を動かさず穴惑
刈株のしひなに風の冬めきぬ
百三十七億年後の花八つ手
初霜や僅かに膨れローム層
日没の光の名残石露の花
冬空へクレールン迫る造船所

尾池葉子
大島幸男
長野真久
余米重則
四宮陽一
大口彰子

氷凌集

山裾の日を拾ふごとと冬わらび
外つ国を右隻の流転金屏風
石けりの石の飛びすぎ石露の花
柚子は黄に水尾の里の御陵道
明日伐ると決めてしみじみ散紅葉
岳はまだ岩に日のある夕紅葉

西村みゑ子
羽鳥正子
佐藤美智子
重富國宏
渋谷啓子
遠藤長代

氷積の章

尾池和夫選

2024年1月号

霞袂集

らしからぬ粒立つ雨に火恋し
秋深しジビエの店に鹿の角
忌を修すところに白き秋の薔薇
落人の村は湖底に水澄めり
金木犀鯖街道ははや闇に
蓑虫のどれも短く風叩き

尾池葉子
大島幸男
長野真久
原 稔
四宮陽一
大口彰子

氷凌集

割るるまで鴉が落す鬼胡桃
引算に指貸してやる秋麗ら
氷河湖の藍の深まり鳥渡る
空う元氣出してもひとり夜食摂る
秋蝶に花々小さくなつて来て
新聞をきちんと畳み星月夜

渋谷啓子
羽鳥正子
鴻坂佳子
川内一浩
佐藤美智子
服部喜美子